

審判活動による体育授業への積極的関与と運動有能感に関する研究 — 球技と体育理論の融合に着目して —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 桐山智也

1. 問題の所在と目的

(1) 体育の意義

今日の学校教育における体育の授業では「できる」という技能面が重要視され、技能の習得に多くの時間が割かれている。中野(1999)は体育授業の今日的課題として体育を「一人一人の健康の増進と体力向上を目指すとともに、人間関係の在り方を学修させる教育」、スポーツを「技とスポーツを争う競技であり、技能の優劣を問う」と定義しており、体育授業において体育とスポーツの境界があいまいになった結果、技能偏重を招いていると示唆した。そのような授業に対して運動・体育に対する苦手意識を抱く児童は多いと考えられる。スポーツ庁の調査では、5人に1人の児童が体育の授業に息苦しさを感じていることを明らかにした。小学校学習指導要領体育編(平成29年度告示)にも「運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、体力水準が高かった昭和60年頃と比較すると、依然として低い状況が見られる。」と述べられている。さらに体育の教科の目標の中に、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する。」とある。生涯にわたってスポーツ・運動を行っていくためにも、体育の授業の中で、技能面とは別に子供たちが運動を楽しみ継続して親しんでいけるようなきっかけづくりが大切である。

平成26年の神奈川県立体育センターの学校体育に関する児童生徒の意識調査では、従来の体育のイメージを「体育がつまらない(授業への不満)」「疲れる、痛い(身体的苦痛)」「上手にできない(運動への劣等感)」このように述べている。そこで本研究では運動する時間以外にも

授業へ関与する方法を考え、体育への新しい関わり方へとつなげていく。

(2) 体育理論から見る運動への関わり方

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編には目標の中に「生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かな生活を営む態度を養う。」ことが明記されている。さらに体育理論の内容には、第1学年は運動やスポーツの多様性を学習するようになっている。運動やスポーツの多様性の目標に「(イ)運動やスポーツには、行うこと、見ること、支えること及び知ることなどの多様な関わり方があること。」とされている。佐藤、友添(2008)は体育理論の内容は「運動やスポーツを知的レベルで捉え、できることと同時に、運動やスポーツの仕方、あるいは運動やスポーツの原理や法則、そしてそれらの社会的な意味や文化的意義をわからせることが重視される領域であり、現代の体力に関する課題を解決するために必要不可欠な内容である。多くの場合体育は体を動かす「する」スポーツであるという理解がされており、「みる」「支える」「知る」といった多様な関わり方があるという考え方はいまだ十分に広がっていないという見解を示している。笹川スポーツ財団の「10代のスポーツライフに関する調査」では「する・みる」というスポーツ行動が全体の7割を占めている。10代のスポーツライフはスポーツを「する」行動を中心に、それに「みる」行動が加わる構造となる。「支える」に着目すると、「支えるのみ」タイプは0.3%にすぎず、「する・支える」タイプは4.4%、「見る・支える」タイプは0.1%と、スポーツを支える文化が定着していないことが伺える。「する」「見る」「支える」

「知る」の全ての要素を含む審判活動の実践を行い、新たな体育への関わり方を模索していく。

そこで本研究の授業における審判活動が、生徒の運動有能感にどのような影響があるかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1)実習校と実習方法

実習校：山梨県内公立中学校

実習期間：5～12月(週1～2回)

授業観察：第1学年1～3組、第2学年1～3組の保健体育の授業

(2)授業実践

①授業概要

対象：第1学年(34名)

日時：10月23日～11月15日(全9時間)

単元：「E 球技 イ ネット型 バレーボール」

②単元について

バレーボールは、ネットをはさんだ2つのチームが互いにボールを相手コートへ打ち合うチームスポーツである。ネットをはさんでいるため、お互いが自己のプレーを直接妨害されることなく攻撃し合えるので、チームの作戦を基に声を掛け合ってコミュニケーションをとりながら、互いに助け合ったり、教え合ったりしていくことでチーム力が高まる楽しさや喜びを味わうことができる。

バレーボールでは、チームの仲間が連携し、レシーブ→トス→アタックという三段攻撃をおこなうことが攻撃の基本となる。三段攻撃ができるよう、個やチームで課題を見つけ、課題の解決に向けた練習を互いに協力しながら取り組めるようにしていくことが大切である。

バレーボールは、腕や指先を中心にボールを操作し、パスをつないだり攻撃につなげたりしていく。そのため、ボールを受ける前の体の構え方や腕の扱い方、ボールのとらえ方などを身に付けることが大切である。また、ボール操作に加えて役割に応じたポジションにつくことや、ボールの動きに応じた位置に移動すること、ボールに対して正対することなどの動き方を身に付けることも大切である。さらに、これら

の個人技能を基にして、味方が操作しやすい位置にボールをつなげ、相手コートにボールを返したり攻撃したりする仲間と連携した動きを身に付けることも必要である。

③単元目標

○ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること。第1学年及び第2学年ではラリーを続ける事を重視する。(知識及び技能)

○攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。運動に関する領域における思考力、判断力、表現力等とは、学習した内容を学習場面に適用したり、応用したりし、言語や文章などで表現することである。(思考力・判断力・表現力等)

○球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレーを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとする、一人一人の違いに応じたプレーなどを認めようとする。仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ること。(学びに向かう力、人間性等)

単元計画(★:目標 ○:内容)

1	★バレーについて知ろう ○オリエンテーション ○ボールに慣れる
2	★パスを正確に出せるようになる ○アンダーハンドパス ○オーバーハンドパス
3	★状況に応じたパスを出せるようにしよう ○パスゲーム
4	★サーブとサーブレシーブの仕方を身に付けよう ○サーブ(アンダー・サイドハンド)
5	★三段攻撃を用いてゲームを組み立てよう ○アタック
6	★課題に見合った練習方法を考えよう

	○審判の説明、やり方(実演を踏まえながら) ○チーム別に練習
7	★審判活動で気づいたことで作戦を立て、ゲームをしよう ○ゲーム(審判あり)チームでのミーティング
8	★審判活動で気づいたことで作戦を立て、ゲームをしよう ○ゲーム(審判あり)チームでのミーティング
9	★審判活動で気づいたことで作戦を立て、ゲームをしよう ○ゲーム(審判あり)チームでのミーティング

(3)審判活動について

従来の体育授業であれば、審判をつけず生徒同士でプレーをしながら、審判を行うセルフジャッジであったが、そこで見られた課題として試合を休んでいる(やっていない)グループは端でおしゃべりをしていたり、授業に関係ないことをしているといった課題が挙げられた。そこで審判活動を行う中でプレーしていない時間も、授業に関与できるきっかけづくりを行った。具体的な方法として本実習校はバレーボール部がないため、ほぼ全員がバレーボール初心者である上に、他競技でも審判の経験が少ないため見るポイント、ルールをかなり限定的にして試合を進めた。

(4)運動有能感について

岡沢ら(1996)は「運動に対して内発的に動機づけられるためには運動有能感が重要である」と述べている。運動有能感とは、運動が得意であるという「自分に対する自信」や「努力すればできるようになるという自信」、運動場面で周りの人々から「受け入れられているという自信」のことである。この3つの自信を高めることで、運動が好きになり、生涯にわたって運動に親しむ児童の育成につながると考えた。運動有能感は以下の3因子に分類される。各因子の定義は以下のとおりである。「身体的有能さの認知」自己の運動能力、運動技能に対する肯定

的認知に関する項目「統制感」練習をすれば、努力すればできるようになるという項目「受容感」運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知に関する項目でそれぞれ構成されている。身体的有能さの認知や統制感の構成として技能に対する肯定的認知や努力すればできるといった文言があるのに対して、受容感と比較的スキルが低い生徒にとって周りの環境次第で向上させやすい項目である。そこで受容感を高める工夫として大友(2010)は「受容感」を高めるためには、どのようなグループを編成するのかが重要である。グループをただ編成するだけでは運動有能感(特に「受容感」)が高まるわけではなく、グループの雰囲気や普段の人間関係が大きな影響を及ぼすことが考えられる。グループ内での役割分担を明確にして、全員が学習に参加できるような工夫をすることで、様々な意見の交流や新たな気づきが生まれ、それを互いに認め合い、共感し合うことで、受容感を高めることができる。審判活動で役割分担を行い、受容感を高めることで、生涯にわたって運動に親しむ態度を養い、生涯スポーツへとつなげる。「する」以外のスポーツ・運動への関わり方から、新たな気づきや自己に適した楽しみ方を本研究では見出せればと考える。

(5)分析方法

①授業アンケート

授業実践の前後に行う。体育やバレーボールに対する意識や知識を授業前に調査する。授業後には、計9時間での技能の伸びや審判活動に関しての感想を記述式で調査を行う。

②運動有能感尺度による分析

本研究の有効性を「運動有能感」の視点から考察するために、運動有能感の高まりについては、岡沢らの作成した運動有能感尺度(次頁図1)を利用して検証を行う。運動有能感尺度を授業実践前・授業実践後に実施した。「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の高まりは、各因子に対応した質問の選択肢の得点を合計し、その得点の変化によって測定することができる。(各20点満点)また、「運動有能感」の高まりは「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」

の合計得点 (60 点満点) の変化から測定することができる。各因子の得点の変化とその要因について考察する。

表 1

因子	質問項目
身体的有能さへの認知	1. 運動能力が優れているほうだ
	4. 運動について自信を持っているほうだ
	7. 少し難しい運動でも、努力すればできると思う
	10. 運動をしている時、友達から励ましの声がある
統制感	2. たいていの運動は上手にできる
	5. 練習をすれば、運動は必ず上達すると思う
	8. できない運動も練習すればできるようになると思う
	11. 一緒に運動する友達がいる
受容感	3. 運動の上手な見本として、よく選ばれる
	6. 努力をすればたいていの運動は上手にできると思う
	9. 運動をしている時、教師から励ましの声がある
	12. 一緒に運動しようと誘ってくれる友達がいる

「よくあてはまる」…5 点

「ややあてはまる」…4 点

「どちらともいえない」…3 点

「あまりあてはまらない」…2 点

「まったくあてはまらない」…1 点

③授業内での学習カード

授業後半で行った審判活動に関して生徒自身に点数を付けさせ、活動内で気づいたことや意識したポイントについて記述をさせる。

3. 結果及び考察

(1)授業アンケートより

図 2 は「あなたは運動が得意ですか」という質問に対してのグラフである。「得意」「どちらかというと得意」と回答した割合は 60%、

「苦手」「どちらかというと苦手」と回答した割合は 40%という結果を示した。「苦手」「どちらかというと苦手」と回答した理由について問うと、「外が苦手で、運動も頻繁にやらないから」「自分の中で運動がうまくいった事など経験したことがないから」「ボールを使っての運動やチームで協力する運動など楽しいし積極的に活動したいと思えるが、動くことが好きでないため」といった運動習慣がないことや今までの運動における成功体験の少なさ、運動自体への抵抗感といった理由が散見された。こういった意見があったことから、授業では毎回の基礎トレーニングを行い、ボールに慣れさせる運動を取り入れた。

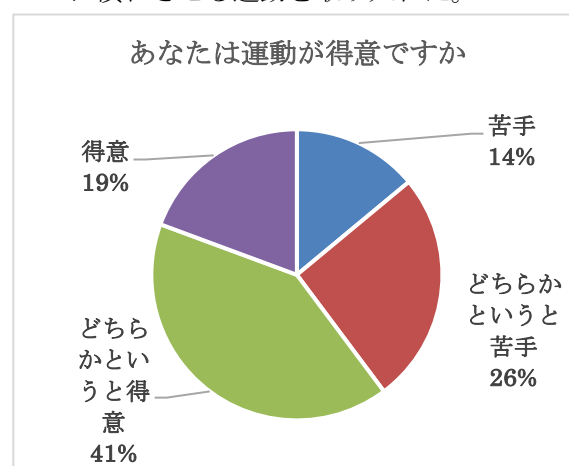


図 2

さらに小学校でのソフトバレーボールの経験から「バレーボールをやっている時にどのような時に面白さを感じますか」という質問には、アタックが決まった時、ラリーが多くつながった時、難しいボールを拾えた時という意見が挙げられ、ボールが関与している中での成功体験を積むことで、積極的関与を見込める。審判活動に加えて基本的なボール操作も初歩からの指導を行った。

(2)運動有能感尺度の分析

①身体的有能さへの認知

次頁図 3 は身体的有能さへの認知に関する授業実践前後の比較である。自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する項目である。運動有能感尺度の点数は減少した。授業では初歩的な内容から技能的な指導を行った

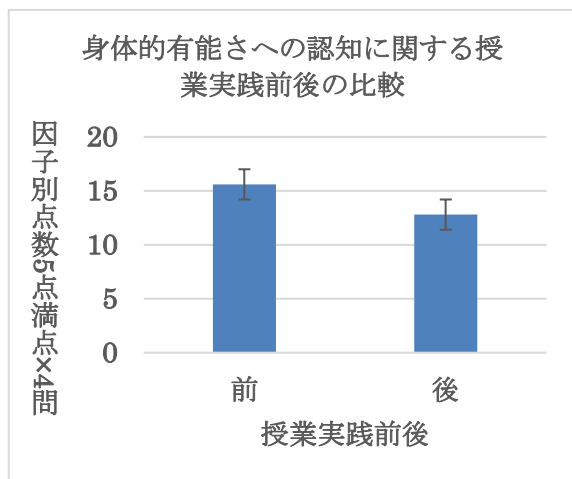


図3

が、最初はキャッチボールさえままならない生徒が多かった。子供の身体能力や運動能力が著しく発達する時期「ゴールデンエイジ」をコロナ禍で過ごしたためか、技能の伸びは感じたものの苦手意識は拭えなかったことが、数値が減少した要因と考える。

②統制感について

図4は統制感に関する授業実践前後の比較である。練習・努力すればできるようになるという項目である。運動有能感尺度の点数は増加した。技能レベルとしては低かったため、初歩的なレベルから始めた。練習をしていく過程で、上手にできる感覚までは行かずともコツやポイントを掴めた生徒が見受けられたことが数値増加の要因と考える。

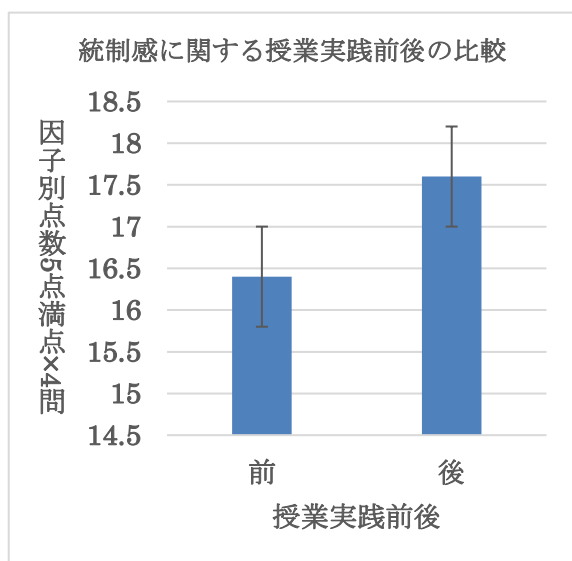


図4

③受容感について

図5は受容感に関する授業実践前後の比較である。運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知に関する項目。技能面で困難を感じていた生徒も審判活動であれば自信をもってできたという振り返りもあり、授業内での居場所ができていた。審判に関して教師から褒められる経験も得られたことが、数値増加の要因と考える。

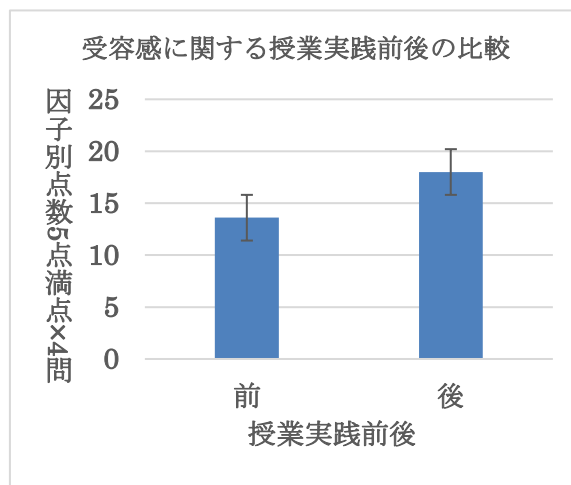


図5

④運動有能感について

次頁図6は運動有能感に関する授業実践前後の比較である。身体的有能さへの認知、統制感、受容感の合計を示したものである。t検定の結果、 $p < 0.05$ より授業実践前後で有意差が見られた。城間(2010)は運動有能感を高める学習指導の工夫の中で学び合いと運動有能感について述べている。体育科において学び合うとは、互いの動きを見合ったり、補助し合ったりする活動を通して、でき映えやフォーム等の理想的なイメージと、自己の動きを比較してどうなのかを客観的に捉えることができる。フィードバックを繰り返し、技能の習得にもつながることから、「身体的有能さの認知」や「統制感」を高めることが期待できる。また、仲間と課題解決に向けた練習を協力して行う中で責任・公正・協力といった社会的な態度を育成することができると共に、相手の良さを認め合い、共感し合うことで、「受容感」の高まりにもつながると考える。学び合いは運動有能感を高めるため

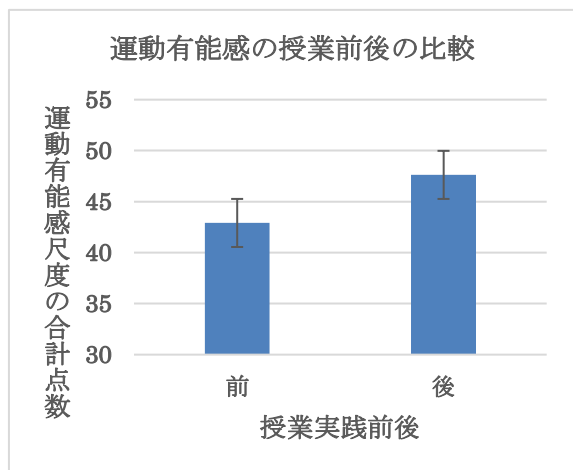


図 6

の有効な手立てであると考え、学び合いを通して、すべての生徒に技能習得の機会を与え、仲間と肯定的な人間関係をつくることで、運動有能感を高める。授業内での審判目線から見るゲームでの学び合いが運動有能感の増加につながったと考える。

(3)事後アンケートの結果より

図 7 はプレーの伸び具合を調査したものになる。83%の生徒が「4」「5」の高い数値を示した。授業の充実度としては高かったことが伺える。「2」と示した一名は「バレーボールの授業で知識やルールについて理解が深まりましたか」という質問に対して「いいえ」と回答。技能のレベルが上がらないことに加え、バレーのルールが理解できないという生徒にとっては、審判を導入した体育の授業は向いていないと感じた。

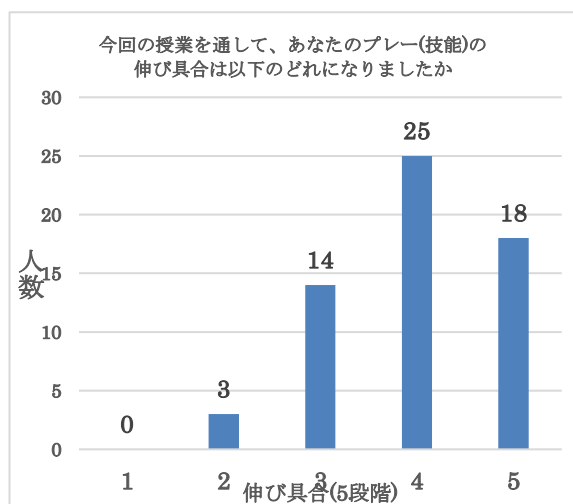


図 7

次に学習カードの記録から審判活動についての振り返りを3点満点で点数を付け、点数を付けた理由や審判をやっている気付いたことを記述した結果、振り返り得点の差によって気づいたことの記述に差が見られた。

振り返り点数3点

- ・審判をしながら空いているスペースを確認できたし、他チームがどんな声掛けをしているかを観察できた。
- ・審判のシグナルを正確にできた。うまい人のプレーを観察できた。

振り返り点数2点

- ・ルールは分かっていたけど、シグナルに少し不安があった。
- ・観察するように意識はしたけど、余裕がなかった。

振り返り点数1点

- ・ルールやシグナルが複雑で自信をもって審判ができなかった。

振り返りの点数が高い程、振り返りの内容の充実が伺えた。特に3点の生徒は授業内で意識した点で客観視や観察という文言を多く取り入れて振り返りができていた。

続いて、事後アンケートで「授業で行った審判活動に関してあなたはどのように感じましたか」という質問と「今回の授業を通して、あなたのプレー(技能)の伸び具合は以下のどれになりましたか(5段階評価)」を照らし合わせ5段階評価ごとに審判活動の感想を見るとプレーの伸び具合の点数別に比べた。

3点の生徒

- ・他のチームのプレーを客観的に見ることで自分のチームの反省もできてよい活動になったと思う
- ・自分も動きながら、他のチームのプレーを客観的に見られてとても参考になった

4点の生徒

- ・他の人のプレーを見て、自分たちの課題を見つけることができたので、成長に繋がった
- ・審判をすることで上手な人のプレーを見ることで、その競技について知ることができると思った

5 点の生徒

・プレーするだけだと気づかないことにも気付ける活動だと感じた

事後アンケートで調査したプレーの伸び具合の平均は、4.1 であった。よって平均以下である3点、4点の生徒も審判活動に関する感想はただ審判に関しての感想ではなく、審判活動から何を学んだか、そこからどのような思考を働かせたかまで記述から読み取ることができ、技能面で苦手意識を抱いている生徒でも授業者の審判活動をやる意味を理解し、そこから自身のプレーにも還元し、ゲームをする際の作戦会議で積極的に意見を出すなど技能面に加え、それ以外の影響も見ることができた。

生徒の審判活動や授業の様子を見て、おおむね主審、線審のやり方を理解し、シグナルもつけて試合運営を行えるようになった模様。ラリーが中々つながらなかったため「見る」という視点を養うことに困難さを感じた。ルールや場の設定を工夫することで改善ができると考えた。バレーボールが苦手な生徒にとっては、審判活動が授業に関与するきっかけや居場所づくりにつながったと考えられる。

最後に図8は事後アンケートで「今後の体育

の授業の単元でも、あなたは可能であれば審判活動に取り組んでみたいですか」という質問に回答したグラフである。あまりやりたくないと回答した者の技能の伸び具合を見ると全員(9名)「伸びた(5)」と回答した。技能に関して自信を持っている生徒は、審判よりも実技の時間を多くとりたい。逆に技能の伸びを「3」や「4」と回答した生徒は「是非やってみたい」「機会があればやってみたい」と回答技能レベルが低い生徒や伸びに自信がない生徒にとって審判活動に肯定的な考えを持っている。

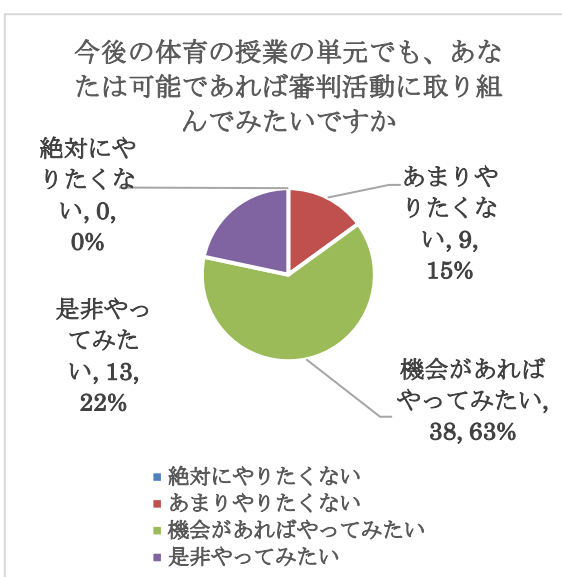


図8



4. まとめ及び今後の課題

本研究は審判活動が運動有能感に及ぼす影響を球技と体育理論の実践を通して研究を行った。結果として審判活動は多くの生徒にとって運動有能感に大きな影響を及ぼすことが明らかになった。本研究の成果として1つ目はバレーが苦手、技能レベルの低さを感じている生徒にとって審判活動は自身の居場所を実感できる場として有効である。体育授業への積極的関与と参加意欲の向上につながった。2つ目は審判活動を導入した授業は、運動有能感特に、「統制感」「受容感」に影響を及ぼすことが分かった。受容感の増加に伴って、バレーボール以外にも体育の授業または生涯にわたってのスポーツライフの形成に関与できたと考えられ

る。3つ目は審判の目線から試合を観察することで、作戦を立てるときに役立てることができた。さらに授業内の対話の充実につながった。

次に課題を述べる。まず授業実践全体の課題として試しのゲームを行った際に、サーブが入らない。入ったとしてもレシーブができない。レシーブができてもしにつながらないとバレー特有のつなぐ面白さを実感できなかったことから特別ルールを設け、ワンバウンドやキャッチのルールを加えてサーブを投げて入れるのも可としたところつなぐという部分に関しては改善された。ルールを改変したことによる弊害も少なからず見られた。キャッチやワンバウンドのルールを取り入れたことで、キャッチをした後にどうしていいのかわからず、数秒間保持してしまう、ボールをどこに投げたらいいのかわからない(ライナー性のボールや腹部周辺に投げってしまう)、相手コートから遠ざけてしまい、パスが届かない生徒が多く見られた。ルール以外でラリーが続かなかった原因として考えられることは3つ挙げられる。

1つ目はネットが高かったことである。本授業は205cmで行ったが、ボールの最小である200cmもしくは中学1年の段階であればバドミントンコートでの実施も取り入れる必要があった。2つ目は役割がはっきりしていなかったことである。3段攻撃やアタックの練習を行ったが、セッターの動きをできず、フォーメーションの説明をしたせいか、場所が固定化されてしまい、自分の場所以外にきたボールに対して反応ができなかった。3つ目はコートが広がったことである。サーブにチャレンジしても届かない生徒が多かった。縦の幅を縮めればラリーの継続が見込めると考えた。

本研究の課題は2つ挙げられる。1つ目は技能に困難さを感じているかつルールについての理解もない生徒にとっては逆に審判活動は窮屈さを感じるということが分かった。このような生徒に対しての支援として、授業での居場所づくりとして、ICTの撮影に協力を仰いだり個々人の特性に応じた支援が求められる。2つ目は他の球技に関しても同じ方法で実践できるか不

透明である。本実践のようにルールを簡易化させることで審判活動を行っていく方法が考えられる。

5. 参考・引用文献

- 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編
- 香西 庸希, 中川 麻衣子, 米谷 正造, 中尾 有子, 2020, 中学校・高等学校保健体育科における体育理論の実態に関する研究—大学生を対象とした質問紙調査—, 岡山体育学研究 pp.11-19.
- 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎, 1996, 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究 16 (2), pp.145-155.
- 岡澤祥訓, 三上憲孝, 1998, 体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係, 体育科教育 46 (1), pp.47-49.
- 佐藤豊, 友添秀則, 2011, 楽しい体育理論の授業をつくろう, 第3版, 大修館書店
- 城間朝司, 2010, 運動有能感を高める学習指導の工夫-水泳学習における学び合いを通して-, 沖縄県立総合教育センター, 48.
- 竹岡伸一, 2002, 小学校高学年児童の体育授業に対する好意度を決定する要因分析と授業実践への適用, 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, pp.440-441.
- 神奈川県立体育センター研究報告書(H27)「学校体育に関する児童生徒の意識調査～中学生の意識～」
- https://www.pref.kanagawa.jp/documents/12706/2400_1.pdf 【1/31 最終閲覧】
- 笹川スポーツ財団(2019)「青少年スポーツのする・みる・ささえるの実態と課題・ささえるに着目して-」
- https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/column/20190913.html 【1/31 最終閲覧】
- スポーツ庁 Web マガジン(2018)「嫌い」を「好き」に変えるために～学習指導要領改訂〈小中学校・体育〉
- <https://sports.go.jp/special/policy/new-curriculum-guideline.html> 【1/31 最終閲覧】